

能界展望(平成十年)

ニシノ, ハルオ / 西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

野上記念法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research
Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

17

(終了ページ / End Page)

33

(発行年 / Year)

2000-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020537>

能界展望 (平成十年)

西野春雄

概観

平成十年(一九九八)の能楽界は、前年度の名古屋能楽堂の竣工に続いて、豊田市能楽堂・新潟市民芸術文化会館能楽堂など、地方での能楽堂竣工があいついだことが特筆される。そして、各地に建設された能楽堂の一つのモデルともなっている国立能楽堂が開場十五周年を迎えた年でもあった。関西では大江能楽堂が築後九十周年を迎え、二月には京都の観世会館の築後四十周年記念能が行われた。

人事に目を転ずれば、六年ぶりに日本能楽会会員の第十次増員が行われ、あらたに五十七名が新会員となった。また、三月十七日付で葛野流大鼓方の亀井忠雄氏が宗家預かりとなり、五月には、幸流小鼓方の増和博朗氏と高安流大鼓方の安福建雄氏のお二人が、いわゆる人間国宝に選ばれ、十月には観世流シテ方観世榮夫氏が能楽界から久しぶりに第二十八回モービル音楽賞を受賞するなど、慶事が続いた。

他方、一月に歴史家の林屋辰三郎氏、四月に能楽評論家の長尾一雄氏、五月に能楽写真家の吉越立雄氏、六月に元国立能楽堂企画制作課次長の油谷光雄氏、八月に金剛流宗家金剛

巖氏、十月に能の英訳を精力的に進めた島崎千富美氏、十一月に『能楽思潮』や「東京能楽鑑賞会」の立ち上げに尽力した佐々木直氏、十二月に能や美術・工芸・紀行・古典などの随筆や評論で知られる随筆家の白州正子氏と、能役者・能楽写真家・能楽研究者・随筆家と、訃報があいついだ。春から夏にかけて喪服を着ない月はなく、詳しくは物故者の欄を読んでいただきたい。

能界活動に目をやれば、各流各派の定期的な活動のほか、記念の催しや個人の会・同人会も多く、催会の数の上では盛況を呈しているように見える。しかし、忙しすぎるのも善し悪しで、ともすると情性に流れる危険性が潜んでいる。また、これまでもしばしば言われて来たことであるが、若い人たちが稽古に充てる十分な時間が確保されているのかどうか心配でもある。流儀あげての別会といいながら、見所がやや寂しい会もあった。

また、近年の傾向として、能・狂言の入門・啓蒙書の出版が目立つ。ここでは書名はあげないが、戦後の能楽出版史を概観しても、こんなに刊行が続出した年もないと思う。それに引き換え、謡本が売れなくなっているという。原因の一つ

にコピー全盛時代を指摘する声もあるが、それは現象面に過ぎまい。謡人口そのものが減少しているようで、根はもっと深い所にあるような気がする。

以下、誠に狭い見聞で、しかも関東に傾きがちで恐縮ながら、平成十年の能楽界の出来事や事象を記録を中心に概観し、二十一世紀も間近い能界を展望することにした。

豊田市能楽堂開場と

新潟市民芸術文化会館能楽堂の竣工

豊田市駅前に建設された「豊田参合館」は、コンサートホール・能楽堂・図書館などからなる複合文化施設で、洋と和の古典をセットとしていることが特色である。

豊田市能楽堂は同館8・9階にあり、能舞台は、切妻造り、総檜張り。本舞台は三間×三間(間口五・六五メートル、奥行五・六五メートル)、地謡座四尺×三間(一・三五メートル×五・六五メートル)、後座二間×三間、橋掛り一・五間×六間。それに鏡間、板の間(装束の間、練習用の部屋として使用可)一五畳、楽屋ほかがある。見所は四五八席(正面二〇五脇正面一二六、中正面一二七席)。車椅子席三席。鏡板は田淵俊夫氏の揮毫。

開場を記念し、オープニング・シリーズとして、舞台披き祝賀能(五流家元総出演)が11月3日に、名匠鑑賞能(人間国宝の競演)が14日に、狂言づくしの会(中世の笑い)が29日に、名曲鑑賞会(珠玉の名品)が12月12日に、中国の歌と踊り(草

原情歌)が19日に開催され、邦楽演奏会(名手の競演)が1月10日に、郷土創作狂言(名譽市民本多静雄氏の台本による)が12月5日に開かれ、ほかに豊田市民演能会(能舞台に立つ)が数日間開催され、開場を祝った。

同じ愛知には、熱田神宮能楽殿、岡崎二の丸能楽堂、近年開場したばかりの名古屋能楽堂があり、豊田市能楽堂を加え四つの能楽堂を数えることとなった。それぞれ特色を生かし、企画に独自性や郷土色を発揮し、観客層の開拓と、能楽の発展に力を尽くしていただきたいと思う。

一方、新潟市民芸術文化会館能楽堂は、全国最大規模の芸術文化施設として10月22日にオープンした新潟市民芸術文化会館の中にできた(新潟市学校町通一番町六〇二一)。同会館は6階建ての近代建築で、七つの空中庭園と三つの専用ホールで構成されている。1階から3階にかけて最大収容人数二千人のコンサートホールと九百人の劇場がロビーを挟んで左右に配され、4階にギャラリー、5階に能楽堂、6階が展望ラウンジとなっている。

能楽堂は、正面一八四、脇正面九五、中正面一〇八席の計三八七席、檜床の舞台、檜皮葺きの屋根の伝統的な形式の屋内能楽堂。舞台は五・九八メートル四方、橋掛りは幅二・七メートル、長さ一〇・四メートル。鏡の間(一八畳)・装束の間(一四畳)に、茶室にも利用可能な楽屋が三室ある。舞台正面の鏡板を外すと中庭が見え、野外の雰囲気も味わうことができるようになってい

開館記念能は10月22日が《観世流演能》、第一部が「翁」(観世清和・観世芳宏・山本東次郎)、第二部が狂言「三本柱」(山本東次郎)、能「養老水波之伝」(前・観世喜之、後・観世芳伸)。11月11日が《宝生流演能》、第一部が「翁」(宝生英照・高橋章・山本東次郎)、第二部が狂言「末広」(山本則直)、能「高砂」(前・本間英孝、後・田崎隆三)。

ほかに四日間五公演の祝賀能が開かれ、開場を祝した。本格的な能楽堂の完成を期に、上越能楽界のいっそうの発展を期待したい。

国立能楽堂の十五年

【能楽三役の後継者養成ほか】

九月、国立能楽堂が開場十五年を迎えた。現在、年間約五十三回の公演を行っているが、開場以来、企画・制作側の努力と、演者および関係者の協力によって、順調な歩みを重ねて来た。昭和62年12月「武文」の復曲上演から始まった研究公演も平成9年12月の新作能「額田王」まで六回を数える。

開場以来の懸案であった小書付き特別曲の上演問題も、今年度になってようやくまとまった。今後は、芸術精神とはまったく無縁な事大主義・権威主義などと決別した、創造精神あふれる舞台を実現してもらいたい。

焦眉の急であった能楽三役後継者の養成事業は、講師の先生方の努力と研修生諸君の精進によって、現在プロとして就業しているのは十三名を数えるに至った。また現在、第四期

生(新人)として七名(ワキ一名・笛三名・小鼓二名・太鼓一名)が、第五期生(既成者)として四名(笛一名・太鼓一名・狂言二名)研修中である。それぞれ道は険しいと思うけれど、先輩たちが続くよう、頑張ってほしい。

なお『国立能楽堂』平成10年9月号は《開場十五周年によせて》を特集し、羽田昶氏が「公演活動と調査養成事業をふりかえる」を寄稿し、分かりやすくまとめている。

【企画公演の中から】

「鶏立田」上演。9月18日。昭和36年12月、金春流の番外曲復曲運動の第一弾として本田秀男が復曲した同曲を、三十七ぶりに子息の本田光洋が再演した。配役は、前シテ女・後シテ鶏の霊本田光洋、ワキ信貴山の山伏森常好、ワキツレ平岡某宝生欣哉、ワキツレ平岡の従者梅村昌功・則久英志、アイ平岡の下人善竹十郎、笛藤田次郎、小鼓鶏沢洋太郎、大鼓亀井広忠、太鼓金春国和、後見金春信高・横山紳一、地謡金春安明・高橋汎ほか。芸術祭能。

現代の能では珍しい憑き物ゆえの物狂いが興味深く、後シテの面に「鶏」の銘のある内藤家伝来「霊女」を用いたのも話題を呼んだ。延岡の内藤記念館所蔵の面が特別の配慮で使用されたもので、古怪な女面が大変効果的であった。普段、展示ケースや収蔵庫に納められている面が活用された意義は大きく、面はやはり演能に用いられてこそ、生きもし、その価値を発揮する。今後は、保存状態にもよるけれど、各地の博物館に収められたままの能面・能装束の活用にも配慮し、

使用にも心掛け、価値の再発見に努めていただきたいと思う。

【特別展示】

能と縁起絵——道成寺縁起を中心に——。11月27日〜12月26日。和歌山県日高郡川辺町鐘巻の道成寺蔵「道成寺縁起」上下二巻を中心に、「道成寺」関連の能面・能装束などを展観した。26日には、特別企画公演「縁起と能楽」と題して、現在では道成寺でのみ行われている絵巻を用いた小野成寛師による「絵解き」が行われた。立て板に水の名調子の絵解きに続いて、主催公演では初めての「道成寺」（シテ・梅若六郎ほか）が上演された。

ちまひまな催し

各流各派の中心的な活動の場である月並能や定期能をはじめ、襲名披露や追善会、あるいは最盛時よりは幾分減少したかのような全国各地での薪能、逆に増えて来たホール能、あるいは趣向を凝らした蠟燭能、宗教者をシテとする新作能の続演など、平成十年も各種各様の催しがあった。

特にこの年は能楽界にとって大恩人ともいうべき豊臣秀吉が没した慶長三年（一五九八）から四百年に当たり、それを記念して秀吉ゆかりの大阪で《豊公能の夕べ》が開かれ、吉野の花見に詣でた豊太閤の前に、蔵王権現が現れ、奇瑞を見せる「吉野詣」が復曲上演された。

今から百年前の明治三十一年（一八九八）四月、豊太閤三年祭に能楽会が中心となって、京都は阿弥陀ヶ峰の太閤垣で

東西連合の大能を催し、復曲能「柴田」（シテ金剛謹之輔）や新作能「豊国詣」（シテ平瀬春愛による自作自演）などが上演された盛儀があったが（『風俗画報』六四号豊公三百年祭記念臨時号・明治31年5月15日で詳しく報道）、それには及ばないものの、能楽界が秀吉の恩を忘れなかったのは何よりだった。こうした復曲能をはじめいくつかの新作能など、意欲的な公演も少なくなかった。ここでは、その一部を紹介する。

《金春信高の「関寺小町」》

10月3月22日。金春円満井会特別公演。国立能楽堂。「関寺小町」シテ金春信高、子方金春政和、ワキ福王茂十郎、ワキツレ福王和幸・森本幸治、笛藤田大五郎、小鼓宮増純三、大鼓柿原崇志、地謡本田光洋ほか、後見金春晃実ほか。喜寿記念の能で、この日は最初に「乱双ノ舞」金春安明・金春憲和ほか、続いて狂言「福の神」大蔵弥右衛門ほかがあった。

当日配布のパンフレットに掲載の表章氏の調査によれば、明治維新以後でもわずか二十二の上演例を数えるだけの秘曲「関寺小町」。戦後初の上演は昭和21年の金春光太郎（後の八条）で、金春流としては宝暦9年（一七五九）に金春大夫氏綱が江戸城で舞ってから一八七年ぶりの上演。その後、昭和30年に桜間弓川が舞い、翌年に八条が再演したので、今回の上演は金春流としては四十一年ぶりとなった。種々の事情によるとは思うけれど、観世流は昭和36以後11回（10人）も演じているのに、宝生・金剛・喜多流は戦後に一度もない。あまりに重視して、せっかくの名作を埋もれさせないようにしていた

だきたいものである。

《豊公能の夕べ》

10月8日。伏見桃山城天守閣前芝生広場。仕舞「松風」山本勝一、「船弁慶」河村楨一、お話し「秀吉と吉野詣」天野文雄、狂言「棒縛」茂山あきら・網合正美・丸石やすし、復曲能「吉野詣」シテ河村信重、ツレ河村博重・山本博通・味方玄・河村浩太郎、ワキ福王和幸、笛杉市和、小鼓吉阪一郎、大鼓山本哲也、太鼓前川光範ほか。

【新作能の動き】

昨年に引き続き平成十年も新作能があいついだ。題材面で、蓮如や空海、あるいはトマス・ベケットなど日本および西洋の宗教者に取材した作品が目立つのも近年の一傾向である。以前にも横道萬里雄作「鷹姫」や高橋睦郎作「鷹井」など、西洋の戯曲に取材した新作能も生まれているが、近年ますます西洋の物語や戯曲に取材した新作能が盛んになってきたように思う。

①新作能「蓮如」

初演4月13〜15日。親鸞上人五百回遠忌記念能。西本願寺南舞台。作詞・作曲・演出青木道喜。配役、母・菩薩片山九郎右衛門、弟子法敬坂苗融、蓮如宝生閑、桐細工師の妙好人才市茂山千之丞ほか。

再演7月11日。沙羅の会広島公演。広島市中区民文化センター、アステールプラザ能舞台。配役、母・菩薩片山九郎右衛門、法敬河村隆司、蓮如青木道喜、才市茂山千之丞ほか。

両日とも能の前に同じく青木道喜作の新作狂言「はしくれ法師」を上演。

②新作狂言「こぶとり」

4月13〜15日。伝統の現在スペシャルⅢ。国立能楽堂。脚本北村想、作曲茂山千五郎、演出茂山千五郎・野村萬斎。配役、おじいさん1茂山千作、おじいさん2野村万作、息子・鬼3茂山千五郎、妻・鬼4茂山七五三、鬼1野村萬斎、鬼2石田幸雄。

③新生作「えにし祭」

4月29日。新生の会。国立能楽堂。野村万之丞プロデュース。脚本・演出野村万之丞・小田幸子。配役、大名野村英兵、太郎冠者増田秋雄、禰宜野村良介、神主野村万蔵、男森常好、女鶴沢久、白蛇観世栄夫。笛槻宅聡、小鼓宮増純三、大鼓佃良勝、太鼓観世元信、ほか。水戸齊昭作の狂言「鹿島詣」と作者不明の能「常陸帯」(廃絶曲。明治まで宝生流所演曲)をあわせ、狂言に始まり、狂言の中に能が存在する構成。

④新作能「空海」

初演11月16日。成田山開基千六十年、開山寛朝大僧正千年御遠忌成田山薪能。新勝寺境内。作堂本正樹、演出・節付・作舞梅若六郎、作調松田弘之・大倉源次郎・亀井忠雄・観世元信、音楽監修丸山比等史、装束監修植田いつ子。配役、空海梅若六郎、貧女・孔雀明王梅若晋矢、観賢僧正宝生閑、老能力山本東次郎、前記四拍子のほかに笙石川高ほか、声明成田山僧侶。

再演 10月24日。サントリーホール。上記のスタッフに、照明沢田祐二、舞台監督加藤三季夫、ほかが加わる。

⑤ コクーン現代能「無」

6月5〜7日。東京渋谷、シアターコクーン。舞踏家大野一雄(九十一歳)と観世榮夫(七十一歳)の共演。構成・演出岡本章。音楽三宅榛名。笛一噌仙幸、小鼓北村治、大鼓柿原崇志、太鼓小寺佐七、謡・コロス瀬尾菊次、小野里修。謡曲「姨捨」、ベケット「ロッカバイ」、那珂太郎の現代詩「秋」から引用・構成されたテキストによる異色のコラボレーション。

⑥ 新作能「鷹姫」

6月30日。観世鏡之亟の会。宝生能楽堂。作横道萬里雄、作曲・作舞観世寿夫、演出野村万蔵・観世榮夫。配役、老人観世鏡之亟、鷹姫大槻文蔵、空賦麟宝生欣哉、岩宝生閑・山本則直・山本順之・観世暁夫ほか。笛一噌隆之、小鼓大倉源次郎、大鼓亀井広忠、太鼓観世元伯。新作能の中では最も多く演じられている作品。

⑦ 創作能「高山右近」

10月14日。金沢文化ホール。作加賀乙彦。演出梅若猶彦、衣装デザイン森英恵。配役、シテ梅若猶彦、ツレ山本正人、アイ野村万之丞・野村史高。笛藤田次郎・根岸啓子・森田都紀、小鼓久田舜一郎、大鼓佃良勝、太鼓金春国和、地頭泉嘉夫ほか。

⑧ 現代語能「トマス・ベケット」

10月16日。新国立劇場。主催・緑泉会「現代語能の会」。

作・演出津村禮次郎、協力エドワード・ホール、能翻案宗片邦義、芸術監督森田拾史郎ほか。配役、トマス・ベケット津村禮次郎、ヘンリー二世野村萬斎、司教鈴木啓吾ほか。笛松田弘之、小鼓古賀弘巳、大鼓大倉正之助、太鼓吉谷潔。声明(真言宗豊山派・孤嶋由昌)、薩摩琵琶(錦心流裏水派・荒井姿水)、中国古典楽器(孟暁亮ほか)。

①は残念ながら実見できなかったが作者からいただいた台本で内容を知り得た。『観世』平成10年11月号掲載の小辰恭子氏「新作能『蓮如』」が両公演の詳しい報告で、広島公演では、大塚亮治氏(島田市在住)の創作面「蓮如」を用いて上演したという。この創作面につき、12月初めに大塚氏の個展が東京銀座であり「蓮如」を実見した。「頼政」「俊寛」「景清」など専用面があるのだから、「蓮如」に専用面があってもいい。台本ともども、さらに練り上げてほしい。

②も実見できなかった。絵本を持った鬼たちが語り始める新作狂言の再演で、初演は一九九六年。好評の由。

③は狂言の中に能が入り込んだ構想が面白く、これまでの新生作のなかでは成功作といえる。②と共に金子直樹氏「新たな試みのさまざま―四月の舞台から」(『能楽タイムズ』平成10年6月号)に批評が載っている。

④の「空海」も話題作。初演は見られなかったが、再演の案内に「空海」は、密教の神秘と官能、空海という巨人の心の宇宙を描き出す壮大な試みである。雅楽において天の光

を表すといわれる笙の調べと、数十人の僧侶たちの厳かにうねり出す声明を取り入れ、神秘なる世界の空気を紡ぐ。冴え冴えと音を響かせるサントリーホールという空間は、まさにうつつの空間といえよう。とある。しかし鑑賞した限りでは、必ずしも好い音響とはいえず、能の音楽があまり生かされない空間のように思われた。僧侶たち五十名による声明につき、大河内俊輝氏は「成田山新勝寺の僧侶の〈声明〉が、日夜唱える読経の訓練行届き、場内制するの圧感となった。それに反し地謡の貧しさ能楽ファンとしては恥かしいの一語——」(『能楽ジャーナル』第27号)と評されたが、私には五十名による声明さえも弱々しく、全体に面・装束や照明などに力点を置き過ぎて、音楽的な流れなど、序破急に配慮が足りないように思った。しかし、その後各地で上演を重ねているのは人気の反映であり、練られてきているようである。

⑤は、観世榮夫が終始その抑えた演技で大野一雄の踊りの魅力をひきだし評判になった公演。筆者も実見。「伝統の中の前衛」は往々にして思惑ばかりが先に立ち、表現の豊かさが失われがちだが、現代能「無」は伝統に新しい意志を吹き込む一つの在り方を示した意欲的な試みだった。結果は平成10年6月13日付『朝日新聞』学芸欄ほかに大きく報道。

⑥は、しばしば上演され、この後も演じ継がれているが、八嶋正治氏の「コクーン現代能と「鷹姫」——六月の能と狂言——」(『能楽タイムズ』平成10年8月号)に「老人は黒い装束で岩の上に立つのが硬質感があり、最後の悪尉風な動きも永

遠に続く日常性の苦渋を表現しているようで面白い」「全体に洋風で精錬された鋼鉄のような感覚は得難い」とあるように、鏝之亟の表現力の豊かさを示した面白い舞台だった。

⑦は実見できなかった。作家加賀乙彦が書き、衣装デザインを森英恵が担当ということでも話題になった。紋付に袴姿の作者が前口上を述べて始まったというこの日の舞台については、鶴羽伸子氏「創作能『高山右近』を観て」(『能楽タイムズ』平成10年12月号)が詳しい。宗教性や哲学的テーマは、能の表現とよく響き合うのか、この年は宗教者を扱った作品が多かった。

⑧も宗教者を描く。新国立劇場の舞台機構を活用しての上演。内容は、一一七〇年、クリスマス・ベケット暗殺事件に取材。扉を開き、王ヘンリー二世の刺客を迎えたベケットの死は果たして殉教か否か。案内に「宗教音楽のルーツ「声明」の響き、「琵琶」が奏でる民衆の哀感。そして中国古典打楽器「編鐘」が時の流れを刻む。98年7月カンタベリーでの公演に続き、新国立劇場プレイハウス(中劇場)で古くて新しい楽劇が誕生」とあった。しかし、声明も諸楽器の使用もさほど効果的とはいえず、バランスを欠き、全体に欲張りな公演。特にラストシーンは強烈なライトが真正面から放射され、シルエットで浮かぶトマス・ベケットの霊の姿に賛否が別れよう。諸役の中ではヘンリー二世の野村萬斎の演技がシャープで印象深かった。

展示会の盛況

平成10年は各地で能楽関係の資料展があいついで開催された年でもあった。それぞれ工夫を凝らし、かなり質の高い展示で、好評を博した。主な展示を左に記す。

① 《能面・能楽祭(新作能面公募展)》

2月6日～17日。福井県今立郡池田町の能楽の里文化会館。池田町・同教育委員会主催。全国三三都道府県から三四四人に及ぶ五六八点(一人二点まで)の応募作品すべてを展示。審査員、能楽師観世榮夫・武蔵野美術大学教授田邊三郎助・丹波篠山の能楽資料館長中西通の各氏。大賞受賞作を用いて「羽衣」も上演。室町の頃からすぐれた面打ちが輩出した越前の地にふさわしいユニークなコンクール。三浦裕子氏が「レポート 越前池田の新作能面公募展」(『能楽タイムズ』平成10年4月号)に詳しい報告を寄稿している。

② 《華麗なる能装束の美》

岐阜歴史博物館(4月10日～5月10日)・群馬県立歴史博物館(5月16日～7月5日)・兵庫県立歴史博物館(7月18日～9月6日)・豊橋美術博物館(10月24日～11月23日)。主催は朝日新聞社とそれぞれの会場館ほか。後援が伝統文化フォーラムほか。コンセプトは「文化の伝承―江戸から現代へ」で、浅井能楽資料館と山口能装束研究所蔵のものが主体。大名家伝来の江戸時代の能面・能装束のほかに、復原装束、江戸時代の養蚕、製糸、織りなどを紹介した版画、養蚕技術の指

導書、養蚕道具、繭の種類など、繭から装束を復原するまでの過程をわかりやすく展示・解説。なお同展は翌平成11年、神奈川のシルク博物館(4月10日～5月16日)で終了した。

③ 名古屋能楽堂 開館一周年記念特別展 《能楽藤田流宗家 藤田家伝来名品展》

4月25日～5月24日。近衛信尋(心山)の勧めで下川丹波守重次(下川丹齋)の門人となった流祖藤田清兵衛は、師より名笛「青海波」、伝書「梅花集 呂・律」などを相伝された名手。開館一周年を記念して展示された名品は、能管「瓦落」、折紙、浄岳清林居士と香誉貞薫信尼画像、笛彦兵衛伝書(一五五二四年九月)、血脈相承、下川丹齋画像、藤田三郎大夫教訓状、沢庵書状(沢庵は藤田清兵衛の叔父に当たる)、梅花集 呂・律、など二十三点。伝来の名品を一同に見ることができ、なかなか興味深い展示であった。

④ 海津町歴史民俗資料館 第六回特別展 《能版画》―玉野コレクション》

4月28日～5月24日。犬山城能楽友の会の玉野宮夫氏所蔵江戸後期から明治期にかけての能・狂言の版画七十余点と能装束模様の版画などを展示した。御奥御能・勧進能(弘化勧進能図・六枚続き)・町入能・京都御所御能・江戸城謡初式次・青山御所・前田侯邸・芝公園楓山の紅葉館の天覧能など。

⑤ 岐阜県博物館 秋季特別展 《能面へのいざない―白山山麓から―》

9月29日～11月15日。白山山麓の寺社の能面を主体に、中

尊寺の「若女」、大和地方の能面、世阿弥自筆能本、白山信仰関連の資料など、約一〇〇点を展示。長滝白山神社の「若い女・尉・黒色尉」、揖斐郡久瀬村春日神社「癒見」など、様式化以前のものと思われる能面群が興味深く、能面のルーツをさぐる好機会でもあった。

⑥ 豊橋美術博物館 《能狂言―豊橋魚町の面と装束―》

特別公開―豊橋魚町能楽保存会の能面・能装束

10月24日～11月23日。豊橋には旧吉田藩主大河内家伝来のものを含む数多くの能・狂言の面や装束が残されており、魚町能楽保存会の資料は全国的にも注目される質を持ったコレクション。これまで大規模かつ総合的な展覧はなく、今回の展示は、約六十領の能・狂言装束に、約五十点の面など、総数百七十点余の特別公開で、確かに質の高いものばかりであった。

龍谷大学国際シンポジウム

龍谷大学国際社会文化研究所主催。テーマ「伝統を超える―伝承・復曲・新作」。7月3～5日。龍谷大学深草キャンパス。メンバーは、日本側、山田庄一、天野文雄、堂本正樹、水口一夫、権藤芳一氏の研究家・演出家、茂山千之丞、高林白牛口二、高林呻二、松井彬、久田舜一郎氏などの能役者、外国側は金敬珠(金州又石大学)、ウィリアム・リー(ミネソタ州立大学秋田校)、リチャード・エマート(武蔵野女子大学)、ローレンス・コミンズ(ポートルランド州立大学)、朴炫国(龍谷

大学)、ジョン・サルズ氏(龍谷大学)ら研究者。

内容は、韓国舞踊・歌舞伎・英語による能・狂言の各ワークショップ、近松座で復曲された元禄上方歌舞伎「けいせい壬生大念仏」・能の復曲・狂言の復曲に関する発表、能や韓国舞踊の技法などを用いての異文化交流の実験と座談会など盛りだくさんだったらしく、発表者のひとり権藤芳一氏の詳しい報告が『能楽タイムズ』59号(平成10年10月)にある。事前の綿密なテーマの絞り込みや時間の調整、参加者の予想の必要性など、いくつかの問題点を指摘し、芸能の国際交流のありかたを提起している。

武蔵薪能と東海大学能

首都圏では珍しい大学主催の薪能が行われた。一つは7月24日。武蔵大学江古田キャンパスでの「武蔵薪能」。主催武蔵大学。後援練馬区・協賛江古田駅周辺商店会。当日の番組と主な演者は、舞囃子「高砂」観世喜正ほか、狂言「佐渡狐」野村万蔵ほか、能「葵上 梓ノ出」シテ永島忠修・ツレ古川充・ワキ宝生閑ほか。上演に先立ち一週間前に羽田昶氏による公開講座「薪能と現代―能の見方にふれて」も開催された。大学と地域社会との交流を感じさせる催し。

もう一つは「東海大学能―薪能形式による―」。東海大学湘南校舎水上特設舞台。10月31日。主催東海大学。番組と主な演者は、舞囃子「敦盛」豊嶋幸洋、狂言「貫智」山本東次郎ほか、能「熊坂」シテ豊嶋訓三・ワキ鏑木岑男ほか。こ

こちらは十年程前から行われていて、大学が主催する新能の先駆的存在。堀越善太郎教授らの尽力で続行している。

武蔵野女子大学能楽資料センター月例研究会

武蔵野女子大学能楽資料センターの月例研究会が、5月から下記の通り行われた(8月は夏期休暇のため休み)。

題目と講師は次の通り。「名古屋の狂言」小林責、「海外における能楽教育」リチャード・エマート、「連歌と能・狂言」池田英悟、「万葉と能」並木宏衛、「能管の特質」三浦裕子、「能の復曲について」羽田昶、「能の小書の現状・その二」西哲生、「兼好と世阿弥の発想」増田正造の各氏(増田氏は平成11年1月)。

昨年の開設二十五周年記念公開講座「能・狂言―二十世紀に向けて」に続くもので、休刊中であった紀要の続刊ともども、同センターの活動再開を喜びたい。

法政大学能楽セミナー

法政大学大学院と能楽研究所が主催する法政大学大学院公開講座「第3回法政大学能楽セミナー」が《手紙や日記が語る能・狂言》をテーマに開催。手紙や日記を通して室町時代から近代におよぶ能楽界を検証しようという企画で、題目と講師は次の通りであった。

「良基と世阿弥―書状を中心に―」百瀬今朝雄氏(10月17日)、「室町後期の社会と能・狂言―当時の日記から―」岩崎雅彦

氏(同上)、「書状に見る江戸初期の能界―観世黒雪・喜多長能―」表章氏(10月24日)、「金春八左衛門安住の日記―大坂勧進のことなど―」伊藤正義氏(同上)、「漱石の日記と書簡―謡を愛好した日々―」小林健二氏(10月31日)、「野上弥生子の日記―近代の名手たち―」西野春雄(同上)。

尊勝院へあてた、少年世阿弥を語る二条良基の書状を偽文書とされる百瀬氏の、歴史家の立場からの講演は興味深く、女房奉書を多用した良基の個性や、世阿弥独自の工夫などがうかがえ、面白かった。毎回百数十名を越える受講生が集まり、昨年同様、一般市民の能楽への関心の高さを実感した。

横浜能楽堂講座「能の周辺」

横浜能楽堂では、開館以来、さまざまな講座を開催し、話題を呼んでいるが、今回は、他の芸能とさまざまな関わりをもつ能を、実演を交えながら、里神楽・地方能・人形浄瑠璃・上方舞・組踊などと比較し、その共通点や相違点を浮き彫りにしていこうという企画。全七回。題目と講師は左の通り。

11月22日「芸能の系譜」(三隅治雄氏)、12月6日「能と地方能」(同氏・大須戸能保存会)。以下は平成11年に開催、1月10日「能と組踊」(同氏・琉球芸能公演団)、1月23日「能と里神楽」(同氏・市場神代神楽萩原社中)、2月14日「能と歌舞伎」(服部幸雄・片岡我當・司会葛西聖司氏)、3月7日「能と地唄舞」(山崎有一郎・観世喜正・神崎ひで貴氏ほか)、3月14日「能と人形浄瑠璃」(山田庄一・豊竹英大夫・鶴澤清

二郎・吉田箕太郎氏)。

金剛永謹氏金剛宗家を継承

金剛流二十五世宗家金剛巖氏の逝去にともない、長男金剛永謹氏が、九月十八日、金剛二十六世を継いだ。永謹氏は昭和二十六年六月二十四日生まれ。父に師事。

亀井忠雄氏葛野流宗家預かりに

瀬尾乃武氏の死去により空席であった葛野流大鼓方宗家預かりに、宗家会の認定により亀井忠雄氏が三月十七日付けで、宗家預かりとなった。

荣誉・受賞など

《春の褒賞・叙勲》 4月29日付

◎紫綬褒章 狂言方大蔵流 山本東次郎氏。

◎勲五等双光旭日章

シテ方金春流 金春欣三氏。

《秋の褒賞》 11月3日付

◎紫綬褒章 シテ方観世流 野村四郎氏。

◎《重要無形文化財個人指定保持者(人間国宝)》

5月15日付けで小鼓方幸流の曾和博朗氏と大鼓方高安流の

安福建雄氏が認定された。

◎一九九八年度(第四十九回)芸術選奨文部大臣賞(古典芸術部門) シテ方観世流 観世榮夫氏。能「檜垣」のすぐれ

た演技に対して。

◎第六回「山本安英の会」記念基金 観世榮夫氏。

◎第二十八回モービル音楽賞 観世榮夫氏。

能の古典や新作のみならず、邦楽や舞踊・西洋劇音楽など、他方面にわたる活動と功績が評価された。これまで能界からは、観世寿夫氏、一噌幸政氏が受賞している。

◎伝統文化ポラ特賞 横道萬里雄氏。

能・文楽・歌舞伎など日本の楽劇の構造研究の第一人者として、能の特質を解明する小段理論を打ち立て、能楽研究を推進し、戦後の能楽復興にもかかわるなど、「日本伝統芸能」の研究、普及、振興に大きな業績をあげられたことが高く評価されている。

◎一九九八年度東京女性財団賞 山階敬子氏。

「伝統的に男性によって伝承されてきた能楽の世界にあって、幼時から能一筋に励み、一九四八年に女性で初めて能楽師として認定され、97年10月に国立能楽堂主催公演に女性として初めて出演を許され、シテを演じ、高い評価を受け」たこと、一般の女性たちに対する能の普及に尽力したことが評価された。

◎第47回横浜文化賞 横浜能楽堂館長 山崎有一郎氏。

「著作・評論を通じ能楽の普及・振興に努め、横浜能楽堂開館にあたっては横浜能楽堂舞台披き公演実行委員会の委員長として貢献、平成八年初代横浜能楽堂館長に就任後は多様な自主事業で、初心者や子供たちへの能楽の普及に尽力して

いる」ことが評価された。

◎国際芸術文化賞 幸流小鼓方穂高光晴氏。

受賞理由「能を実技と学問の両面から研究した功績、特に半世紀にわたって執筆した『未刊謡曲集』の成果」。

◎社会文化功労賞 武蔵野女子大学教授増田正造氏。

受賞理由「多年にわたる研究成果や能の普及活動などを通して、日本文化の振興に深く寄与した功績が顕著である」。

◎第39回CBSクラブ文化賞(くちなし章) 狂言方泉流井上禮之助氏。

◎名古屋芸術賞 芸術特賞 シテ方観世流 梅田邦久氏。

◎京都市文化功労者 京都大学名誉教授 菅 泰男氏。

選出理由「氏は、シェークスピア研究の他に、伝統文化に対する深い見識を持ち、歌舞伎・能など古典芸能や演劇の振興・発展に寄与している」。

◎京都市自治百周年記念表彰 片山慶次郎氏 種田道雄氏

茂山千五郎氏 吉田忠氏 納屋嘉治氏 中村弘子氏

◎大阪文化賞 文化祭賞野口傳之助氏 奨励賞 善竹隆平氏。

◎第19回松尾芸能賞 優秀賞 茂山千之丞氏。

◎第22回上毛芸術奨励賞特別賞 下平克宏氏。

◎第20回観世寿夫記念法政大学能楽賞

文教大学教授 田口和夫氏。

シテ方観世流 山本順之氏(別記彙報参照)。

◎第10回催花賞

元国立能楽堂企画制作課次長故油谷光雄氏(別記彙報参照)。

日本能楽会第十次増員

文化財保護審議会は、平成10年6月8日付けで重要無形文化財「能楽」総合指定保持者に、新たに五十七名を追加認定した。同保持者で構成されている日本能楽会は、8月10日の定時総会において、五七名の新会員を決定し、同日新会員認定書授与式が行われた。平成4年につぐ第十次の増員で、延べ会員数は六五四名に達する(この間に一八五名の方が逝去)。新たに認定された方の氏名は左のとおり(敬称略)。

シテ方

〔観世流 23名〕

青木一郎・赤瀬康高・赤瀬雅則・井上裕久・上田貴弘・梅若晋矢・岡田晃一・河村和重・観世暁夫・五木田三郎・小林喜久・駒瀬直也・斎藤信隆・関根知孝・高梨良一・武田尚浩・田中章文・津田和忠・中村 裕・松本尚之・松山隆雄・森田宰永。

〔金春流 2名〕

栗田亮蔵・守屋泰利。

〔宝生流 4名〕

今井泰行・佐野由於・武田孝史・水上輝和。

〔金剛流 2名〕

種田道一・廣田幸稔。

〔喜多流 2名〕

大村 定・松井 彬。

ワキ方

〔高安流 2名〕

飯富雅介・高安勝久。

〔福王流 1名〕

森本幸治

〔宝生流 3名〕

坂苗 融・高井松男・森 常好。

笛方

〔一噌流 1名〕

藤田次郎。

〔森田流 3名〕

内潟慶三・左鴻雅義・杉 市和。

小鼓方

〔幸清流 2名〕

野中正和・福井良治。

大鼓方

〔葛野流 1名〕

野尻哲雄。

〔大倉流 2名〕

上野義雄・大倉正之助。

〔石井流 1名〕

井林清一。

太鼓方

〔観世流 1名〕

麦谷清一郎。

〔金春流〕

金春國和・前川光長。

狂言方

〔大蔵流 4名〕

岩崎狂雲・佐々木千吉・茂山あきら・古川道郎。

〔和泉流 1名〕

石田幸雄。

能楽協会・日本能楽会関係

◎能楽協会

【役員構成】(以下、『会員名簿』平成10年版(1998年)社団法人能楽協会発行。平成10年1月19日現在による)

《理事長》 片山九郎右衛門

《常務理事》 梅若六郎・坂井音重・武田志房・金春安明・

廣田泰三・香川靖嗣・宝生 閑・柿原崇志・山本則俊

《理事》 浅見真州・守屋泰利・亀井保雄・寺井良雄・金剛

永謹・出雲康雄・福王茂十郎・藤田六郎兵衛・鶴澤速雄・

三島元太郎・前川光隆・三宅右近

《常務理事・東京支部長》 高橋 章

《理事・名古屋支部長》 泉 嘉夫

《同・北陸支部長》 山田太佐久

《同・京都支部長》 片山慶次郎

《同・大阪支部長》 大槻 文蔵

《同・神戸支部長》

吉井 順一

《監事》

渡邊 三郎・檜 常太郎

【会員数】 一四一六名

〔シテ方〕 観世流 649 金春流 119 宝生流 139 金剛流 94

喜多流 60 小計一〇六一名

〔ワキ方〕 高安流 24 福王流 21 宝生流 28 小計 72名

〔笛方〕 一噌流 11 森田流 48 藤田流 5 小計 64名

〔小鼓方〕 幸流 27 幸清流 10 大倉流 16 観世流 5 小計 58名

〔大鼓方〕 葛野流 11 高安流 14 大倉流 11 石井流 11

観世流 1 小計 48名

〔太鼓方〕 観世流 16 金春流 24 小計 40名

〔狂言方〕 大蔵流 90 和泉流 41 小計 131名

支部別 東京 619 名古屋 92 北陸 56 京都 188 大阪 251

神戸 61 本部扱(支部に属さない会員) 149

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》 金春信高

《常務理事》 観世清和・宝生英照・金剛 巖(平成10年8月

1日逝去)・喜多六平太・宝生 閑・金春惣右衛門・善竹幸

四郎

《理事》 野村四郎・井上嘉久・大槻文蔵・高橋 汎・辰巳

孝・廣田隆一・大島久見・福王茂十郎・一噌仙幸・寺井久

八郎・幸 清次郎・宮増純三・亀井忠雄・山本 孝・観世

元 信・佐藤友彦

《監事》 藤波重和・一噌庸一

【会員数】 三二八名

〔シテ方〕 観世流 132 金春流 8 宝生流 30 金剛流 10

喜多流 17 小計 197名

〔ワキ方〕 高安流 9 福王流 5 宝生流 5 小計 19名

〔笛方〕 一噌流 5 森田流 12 藤田流 2 小計 19名

〔小鼓方〕 幸流 9 幸清流 5 大倉流 9 観世流 2 小計 25名

〔大鼓方〕 葛野流 5 高安流 5 大倉流 4 石井流 4

観世流 0 小計 18名

〔太鼓方〕 観世流 5 金春流 10 小計 15名

〔狂言方〕 大蔵流 24 和泉流 11 小計 35名

物 故 者

●林屋辰三郎氏

日本中世史・芸能史研究家・元京都国立博物館館長・京都大学名誉教授。10年2月11日、腎不全のため京都市左京区の病院で死去。享年83歳。金沢市出身。一九三八年、京都大学文学部史学科卒。立命館大学助教授などを経て四八年教授。六九年五月に大学紛争收拾をめぐって大学当局と対立、奈良本辰也・北山茂夫・梅原猛氏らと同大学を辞職した。翌年、京都大学人文科学研究所教授に迎えられ、七四年から七八年まで同所長。その後、京都国立博物館館長・財団法人美術院理事長などを歴任。室町後期から江戸初期に自治意識をもって活躍した京の民を「町衆」と呼ぶ歴史概念を提唱。この町

衆をはじめ民衆を担い手とする文化・芸能をその時代の社会構造と関連させて把握する視点を打ち出した。歴史を文化史的に構成する手法は独創的で、芸能史研究のパイオニアであった。著書『中世文化の基調』『中世芸能史の研究』(文部大臣賞芸術選奨)『歌舞伎以前』『町衆』『日本史論聚』など数多く、責任編集した本に『部落史に関する総合的研究』などがある。八九年度には朝日賞を受賞。『金剛』平成10年5月号に追悼記事。

●宮永 恒一氏

シテ方観世流。10年2月22日、肺炎のため大分県中津市の病院で逝去。享年86歳。観世流準職分。谷村直次郎および初世橋岡久太郎、観世元昭に師事。中津市を中心に活動した。日本能楽会会員(昭和55年以来)。『観世』平成10年5月号に追悼記事。

●長尾一雄氏

演劇評論家。10年4月27日、多臓器不全のため逝去。享年65歳。能楽・邦楽から現代舞踊まで、幅広いジャンルの演劇評論で活躍した。朝日新聞の能評も担当。著書に『能百番』(筑摩書房)、『能の時間』(河出書房新社)など。『能楽タイムズ』に現代能楽師論を連載中であつたが、近年、病を得て活動を中断していた。『能楽タイムズ』平成10年6月号に堂本正樹氏の弔辞掲載。

●豊嶋十郎氏

ワキ方高安流。10年5月4日、肝不全のため市川市の病院

で逝去。享年90歳。明治40年11月25日、高安流ワキ方豊嶋一松の四男として広島に生まれ、父および西村弘敬に師事。豊嶋家は元浅野藩お抱えの能役者の家で、長男弥左衛門(金剛流シテ方。人間国宝)、次男豊(金剛流シテ方)、三男要之介(高安流ワキ方)、四男十郎、五男永蔵(高安流ワキ方)、六男文二(金剛流シテ方)、という能楽一家。日本能楽会会員(昭和40年以来)。『金剛』133号(平成10年9月。実際は11月発行)に追悼記事。

●吉越立雄氏

能楽写真家。10年5月31日、癌性胸膜炎のため東京世田谷区の自宅で逝去。享年74歳。長身瘦軀、物静かな人で、多年にわたり諸流の能・狂言の舞台を撮り続け、昭和55年に「記録写真の域を出なかつたこの分野で新鮮な映像を生み出すことに貢献した」として第二回観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞した。写真集に『吉越立雄写真集—能』(筑摩書房)、はからずも遺稿となつた『吉越立雄写真集 直線の美』(求龍堂)があり、著書・共著にカラーブックス『能』『狂言』(保育社)、『草づくし』(新潮社)、『お能の見方』(同上)、『姿』(求龍堂)ほかがある。一九八七年から一九九一年まで観世寿夫記念法政大学能楽賞の選考委員も勤められた。『能楽タイムズ』平成10年8月号に追悼記事。

●油谷光雄氏

元国立能楽堂企画制作課次長。10年6月21日、食道癌のため逝去。享年52歳。国立能楽堂設立準備室時代から十五年、

初めは福田安男初代主管と二人三脚で、のちにはほとんど独り、企画制作の要として、公共の開かれた場としての国立能楽堂の使命を達成すべく尽力し、成功させた。没後、長年にわたる功績を讃え、第9回催花賞が贈られた。著書に『油谷光雄狂言著作集』(私刊)、編著『狂言ハンドブック』(三省堂)がある。一周忌に、友人たちにより『新編 油谷光雄狂言著作集』『ありがとう アブさん』(非売品)が編まれた。

●吉田定男氏

大鼓方石井流。10年7月4日、多臓器不全のため逝去。享年70歳。西尾孫次郎に師事。日本能楽会会員(昭和53年以来)。名古屋を中心に多年にわたり能楽の振興に貢献。『能楽の友』平成10年7月号に追悼記事。

●赤井藤男氏

笛方森田流。10年7月12日、心不全のため逝去。享年79歳。大阪を中心に活躍。尼崎市市民芸術奨励賞・兵庫県ともしびの賞・大阪府文化芸術功労賞受賞。日本能楽会会員(昭和53年以来)。

●井本完二氏

本名、石光完二。シテ方観世流職分。10年7月13日、心不全のため別府市畑病院で逝去。享年88歳。武田宗治郎および武田太加志、武田志房に師事。日本能楽会会員(昭和50年以来)。九州観世会理事。九州の能楽界、観世会のために尽力。『観世』平成10年10月号に追悼記事。

●金剛 巖氏

シテ方金剛流二十五世宗家。10年8月1日、肺炎のため逝去。享年73歳。本名滋夫。大正13年12月23日初世金剛巖の三男として京都に生まれる。昭和26年に父の急逝により金剛流二十五世宗家を継承、巖を襲名し、流儀の柱として一門を率いた。多彩に芸域を広げ、一三五〇余曲の舞台を勤め、現行曲の殆どを演了した。昭和35年に「泰山府君」、37年に「碁」など、古曲の復活試演にも意欲的に取り組み、その後の復曲運動の先駆となった。59年にはイタリア公演を実現、パチカでローマ法王ヨハネ・パウロ二世の宮殿庭園で、海外初の薪能形式による「羽衣」を献能し話題を呼んだ。シテ方五流の中で唯一関西にある金剛流の宗家として、華やかな下掛りの芸風を確立。晩年は金剛能楽堂の公益法人化を精力的に進め、平成7年6月、財団法人金剛能楽堂財団を設立し、能楽堂の保存・活用、能面・能装束の保存・調達・活用・公開、自主公開能の実施、芸事継承者の養成などの諸活動を通じ、斯界の振興・発展に多大な貢献をなした。日本能楽会会員(昭和40年以来)。『能楽タイムズ』平成10年9月号、『金剛』153号(平成10年9月)・154号(平成11年1月)に追悼記事。

●重本昌三氏

シテ方金剛流職分。10年9月2日、肝硬変のため京都市の堀川病院で逝去。享年66歳。日本能楽会会員(昭和40年以来)。『金剛』154号(平成11年1月)に追悼記事。

●島崎千富美氏

翻訳者・能楽研究者。10年10月14日、逝去。享年88歳。昭和7年3月東京女子大学英文学科を卒業後、出版・放送・映画関係の翻訳・著述に従事。能楽や日本古典文学を愛好し、観能・稽古歴は六十年余に及んだ。ライフワーク能の英訳の仕事は次の諸書に結実した。『THE NOH VOL. I GOD NOH(1972. 檜書店), THE NOH VOL. II BATTLE NOH(1987. 檜書店), THE NOH VOL. III WOMAN NOH BOOK 1(1976. 檜書店), THE NOH VOL. III WOMAN NOH BOOK 2(1977. 檜書店), THE NOH VOL. III WOMAN NOH BOOK 3(1982. 檜書店), Warrior Ghost Plays from the Japanese Noh Theater(Cornell University 1993)ほか。

●佐々木直氏

狂言愛好者。10年11月24日、逝去。享年78歳。昭和33年、観客側が企画・制作する「東京能楽鑑賞会」(代表・小山弘志)の立ち上げや、能楽同人誌『能楽思潮』の創刊に尽力し、普及に努めた。晩年は能楽界から離れていた。『能楽タイムズ』平成11年11月号に追悼記事。

●白洲正子氏

随筆家。10年12月26日、肺炎のため逝去。享年88歳。幼少より二世梅若実、嗣子六郎に能を学び、女人禁制だった能舞台に女性として初めて立った。昭和18年、志賀直哉・柳宗悦らの勧めで『お能』を上梓。以後、晩年に至るまで、能、骨董・匠、古典文学・古典芸能、史跡紀行、師友、性差、などについて多くの随筆を発表した。独特の美意識と激しい批判精

神に貫かれた著作のバックボーンには、能・謡への親炙がうかがわれる。『ユリイカ』平成11年2月臨時増刊「総特集 白洲正子」、『芸術新潮』一九九九年一二月、貴重永久保存版「白洲正子」全一冊などが追悼特集を組んだ。